

かみす

Pick up

- ▶今年度最後の集団健診を実施します
- ▶会計年度任用職員を募集します



まちの魅力再発見

千両と若松

日本の正月を彩る縁起物

竹を組んだ“がくや”の中には、キラキラ輝く赤い実をつけた千両畑が広がっています。若松は天に向かって真っ直ぐに伸び、畑には松のほのかな香りが広がっています。毎年11月から12月が出荷作業の最盛期。日本一の生産量を誇る神栖市の千両と若松について、生産者の思いを聞きました。

AR 広報かみすが
動き出す



[COCOAR2]



アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は12ページ



千両と若松

日本の正月を彩る縁起物



12月中旬の千両市に向けて出荷作業は最盛期を迎える

もうじき、令和となって初めての新年を迎えます。良い年となるよう、願いを込めて正月に飾られるのが千両・若松。その日本一の産地が神栖市です。いま改めて、千両・若松の魅力や生産者の思いを見つめ直します。

日本一の産地

千両・若松は、日本の正月になくはならない縁起物です。なぜ縁起が良いかというと、千両は千両箱や商売繁盛に通じ、赤い実は富と繁栄を表すから。花言葉は「可憐」「富貴」「財産」。一方の若松は、悪い鬼や邪気を追い払うとされており、花言葉は「不老長寿」「永遠の若さ」「勇敢」と、まさに正月飾りにぴったり。目にも鮮やかな赤と緑が、新しい年を華やかに彩ります。

神栖市は、日本一の千両・若松の

産地。東京都中央卸売市場で、茨城県産の千両は6割以上、若松は8割近くのシェアを占め、その9割以上が神栖市で生産されています。神栖市の特産物が、全国各地のお正月を陰で支えているのです。

大正時代に農家の副業として

なぜ神栖市で、千両・若松の栽培が盛んになったのでしょうか？ その歴史を、JAなめがたしおさい波崎千両部会会長の遠藤隆志さんと、同役員の岡野忠夫さんに聞きました。



遠藤さん

「波崎地区で農家の副業として千両の栽培が始まったのは、大正時代初期です。千両は直射日光を嫌うため、昔は利根川沿いの葦を刈って葦簀を作り、それで囲って育てられました。」と遠藤さんが振り返ります。



がくやの中には千両畑が広がっている



鮮やかな彩りが周囲を華やかにする



東京都中央卸売市場などへ出荷



手作業でていねいに選別

戦中戦後や台風襲来など何度も栽培の危機を乗り越えてきましたが、昭和40年頃に千両の価格が下がり、立ち枯れ病が広がったのを機に、松の栽培が一気に普及しました。若松というのは、樹齢の若い松のことです。

「千両も若松もお正月用の花材なので、同じ販路で出荷できます。そのため千両と若松の両方を栽培する農家が多く、まず若松の出荷作業をして、千両の実が赤くなったらそちらの出荷作業に移ります。市場では千両・若松に菊などをセットにした、生け花用の花材商品が使われるようになりました」と岡野さんが話してくれました。

かつては周年出荷される切花は少なく、冬場は市場が閑散としていたとのこと。年末の千両・若松は市場にとって貴重な商材であり、安定供給できる波崎地区は重要な産地となりました。

「がくや」の中で育つ千両

「波崎地区は千両栽培の北限です。大規模に栽培する農家が増えた40〜50年前には、手作りの葦簀では間に合わず、竹を組んだ大型の「がく

や」という囲いの中で栽培されるようになりました」と話す遠藤さん。



千両の出荷作業(昭和40年代)

千両は、とても繊細な植物なので、がくやは、直射日光で葉が焼けるのを防ぐとともに、鳥害から実を守る効果もあります。がくやの中で、枝が真っ直ぐに伸びるよう糸つりをしたり、不要な新芽を除去したりと、手間ひまかけることで実の房が大きく立派な千両に成長。種をまいてから収穫が始まるまで約5年がかりで大切に育てられます。

年末に一年分の千両を出荷

実が赤く色づくのは11月半ば。一面の緑の合間で赤い実がツヤツヤと



畑には松の香りが広がる。密集させて植えることで上へ真っ直ぐ伸びる



水槽で鮮度を保つ



若松の育ち具合を確認する岡野さん



幹の太さと穂の長さで等級が決まる

輝き、この時期にしか見られない見事な眺めとなります。ここからが千両農家にとって最も忙しいシーズンだと遠藤さんは言います。

「12月半ばの千両市にに向けて、わずか1カ月間で一気に収穫し、出荷



作業をしなければなりません。収穫して1本1本余分な枝や葉を取り除き、枝の長さ・実の房数・ボリューム感がそうよう選別し、実が落ちないよう丁寧に包装して箱に詰め、ようやく出荷となります。最も重要なのは、きちんと選別すること。工業製品ではありませんから均一にそろえるのは難しく、手作業なので手間もかかります」

遠藤さんの農園では、出荷作業の時期は50〜60人に働きに来てもらっているとのこと。毎年おなじみの顔がそろそろ機会でもあり、忙しいながらも楽しみにしている人も多いようです。「大勢の人が集まって、無事に出荷作業が済むと、それで一年が終了したなという気持ちになります」

若松に最適な波崎の砂地

若松は露地栽培されており、波崎地区のあちらこちらで松畑を見ることが出来ます。膝丈ほどの松畑、腰の高さほどの松畑と、畑によって切りそろえたように高さがそろい、一面が濃い緑に覆われています。清々しい若松の香りに包まれながら、岡野さんに話を聞きました。

「波崎地区で主に栽培しているのはクロマツです。砂地は栽培に最適で、葉の締まった良い松が育ちます。波崎地区に住んでいると砂地の耕作地を当たり前に思ってしまうのですが、実は日本全国でわずかしかないそうです。栽培で重要なのは、10センチ間隔に密植すること。それにより枝が横に広がらず、お日様に向かって上へ上へと真っ直ぐ伸びるからです」



若松の出荷作業(昭和40年代)



12月上旬の若松市に向けて作業が進む

水槽で若松の鮮度を保つ

雑草や病害虫を抑える管理をしな
がら、3〜4年かけて育てていきま
す。若松栽培には広い畑が必要で、
1年目の畑、2年目の畑、3年目の
畑、4年目の畑でそれぞれ栽培し、
毎年順番に収穫していくこととなり
ます。

松市は、千両市の約1週間前に行
なわれます。それに向けて10月20日
前後から収穫し始め、千両の収穫が

始まるまでの約1カ月で、あらかた
出荷作業を済ませなければなりません。
こちらは大忙しです。

「畑で刈り取って荒選別し、商品
化できる良い若松を作業場へ運びま
す。丁寧に掃除し、幹の太さと穂の
長さで選別。正確で手際の良い作業
が求められます。さらに、鮮度を保
つことも重要です。私のところでは
決められた本数ずつ束ねた後、水槽
に生けて保管していますが、どの農
家さんもそれぞれ鮮度を保つ独自の
工夫をしています」

岡野さんは若松と千両を栽培して
いるため、若松の出荷作業から千両
の収穫作業へと移行する頃合いを見
計らいながら、毎年の繁忙期を乗り
切っています。

伝統を知り自由に飾る

「神栖市は日本一の千両産地なの
に、地元の小学生たちが、がくやの
中で何が育てられているか知らない
というので、小学校の教室に千両を
飾ってもらったこともありました。

なぜ千両が神栖市の花となったのか、
皆さんに改めて関心を持っていただ
ければと思います」と話す遠藤さん。
千両・若松のいずれも、最近は大

きく立派な1等品より小ぶりな3
等品の方が市場で人気があるそう
です。玄関の靴箱の上に気軽に飾れ
るようなサイズが求められている
ということですが。「お正月の雰囲気
を出すには、若松が最高です。和花
でも洋花でも、そこに松が1本加
わるだけでお正月らしさがあふれ
ますから」と岡野さん。

「正月飾りの型にとらわれず、自
由にアレンジして飾っていただけた
らうれしいですね」と二人の思いが
重なります。JAなめがたしおさい
波崎千両部会では、千両・若松の栽
培から出荷までを記録したDVDを
作成するなど、日本一の産地として
PRにも取り組んでいます。

新年への願いを込めて

千両と若松の正月飾りを整えて、
新しい年を迎える。そういう伝統が
薄れてしまっている昨今、改めて
て日本古来のお正月を迎えて
みませんか。

JAなめがたしおさい
波崎千両部会では、各ご
家庭・会社の繁栄を願っ
て、鹿島神宮神職による
ご祈祷を賜り全国へ出荷

しています。

締めくくりに、遠藤さんと岡野さ
んから皆さんへのメッセージをお届
けします。

「地元で育った千両と若松を飾っ
て、良いお年をお迎えください」



鹿島神宮神職による御祈祷 (JAなめがたしおさい)

